

定法度之事略○中

一走湯山之湯、自國他國之人、不謂貴賤、不可湯治事略○中
右所相定如此、狀如件、

天文丑辛二月二十二日

熱海温泉

〔書言字考節用集二〕乾坤熱海温泉賀茂郡

〔類聚名物考地理三十五〕熱海温泉あたまのいで伊豆國加茂郡

〔和漢三才圖會伊豆六十七〕熱海温泉自伊豆權現十八町相模伊豆與入湯人衆

〔古史傳神代八〕神湯とは、神の始給へる意は元よりにて、其湯の神々しき義なるべし右に擧たる

に、非尋常出湯云々と云へる趣にも思ふべし、さて伊豆國は、温泉の多かる國なれば、何の温泉のことならむと、國人

に逢ごと、如此言ひ傳ふる湯ありやと探ぬるに、今は此名を知れる人稀なるが、熱海の温泉

を舊く然も云へるよし、古老の物語なりと云人あり、是に依て、此國の事記せる書どもを集め

て見るに、まづ熱海と云地は東北の極にて、走湯山に近く、今は町屋も多く立並たるが、温泉の

源は町より西北に在て、湊しほの満干に従ひ、晝夜に六度ばかり沸騰こと甚烈く、鹽辛きこと、湊に

異ならず、其湯源の上に、湯宮と云社あり、町家なる湯は、此湯源より竹樋を通して引來るとぞ、

林羅山先生の丙辰紀行にも、走湯より一里ばかり西に、温湯あり、其名を熱海と名づけて、人の

萬の病あるもの浴すれば、驗あり、先年余も人に誘はれて、湯に入らば、熱海と名づけて、見る

に、湊の進退によりて、岩の間より煙むし上りて、人の近づくべからぬほど、熱きに、熱上に

湯涌出て流れ走るを、笈をかけて、家々にとり、槽に湛へて、人々を入けりと記されたり、熱上に

引たる風土記説によく符へり、湯宮と云は、此の二柱神なること言まくも、更なり、熱海温泉記

れ、熱海の温泉は、往昔の海中に、温湯俄に涌出たり、是に依て、彼邊の魚類忽に爛死り、磯に

うち揚るること山の如し、人更に海中に、温湯ある事を知らず、爰に、万巻上人と、果して温泉ありし

か、た此所に來れるが、海に温泉水を里に祈よとて、海人を入れて、功徳せむると、一七日祈りけるに、

忽に、温泉山下に涌出たり、里人奇み思ひけるに、薬師如來、里人の夢に告て、病ある者、この温泉